



## 営内神社とその系譜

坂井 久能 (非文字資料研究センター 研究員)

### はじめに

旧軍は、近代に多くの神社を創建した。部隊がその営内に建てた神社を「営内神社」「隊内神社」と称し、軍の機関や工場などに「構内神社」、軍の学校に「校内神社」、艦船内に「艦内神社」などを建てた（以下「営内神社等」と総称する）。これらは「神社」と称しているが、内務省神社局（後に神祇院）が管理した神社ではなく、屋敷神と同様に「神祠」（艦内神社は神棚）の扱いであって、公衆の参拝が禁じられた。

旧軍はこれらの「神社」をなぜ建てたのか、建ててどうしたのか、敗戦後どうなったのか、軍が創建し管理した靖國神社とどう関わるのか、など謎に包まれた営内神社等が私の主要な研究テーマの一つである<sup>(1)</sup>。

### 1. 石垣島於茂登岳の八重山神社

2019年3月14日、非文字資料研究センター「近代沖縄における祭祀再編と神社」班のメンバーで、石垣島の最高峰於茂登岳に登った。

1945年6月、八重山を守備する独立混成第45旅団は、八重山農学校から於茂登岳中腹に旅団司令部を移して全部隊に戦闘準備を下令するとともに、同じ頃、司令部から急峻な山道を少し登った所に旅団の営内神社「八重山神社」を創建した。この社は、以下の特色や意義を有する興味深い営内神社である。

第一に、石垣島では、紀元二千六百年記念事業として大石垣御嶽の地に「八重山神社」の建設を決めて1940年に地鎮祭を執行した。やがて県主導で「県社八重山神社」として計画されたが、戦局の悪化により八重山には遂に神社が建設されなかった<sup>(2)</sup>。営内神社「八重山神社」は、この動向とは別に軍が建設したもので、社名は旅団が八重山を守備したことに因むものと思われる。

第二に、標高526mの於茂登岳は沖縄県最高峰の山でもあり、『琉球国由来記』によると女神「オモトオオアルジ」が住まうといい、名蔵御嶽などで於茂登の神を拝する信仰の山である。営内神社八重山神社の祭神は不明であるが、旅団が於茂登岳の中腹に司令部を置き、その上方に社殿を建てていることから、於茂登の神を祀り、戦局悪化の中で神明の加護を祈った可能性がある。

第三に、営内神社は連隊や大隊を建設単位とする場合が一般的で、連隊の上部組織である旅団が建設した事例は数少ない。八重山駐屯各部隊が、旅団長指揮の下に団

結して決戦に臨んだ当時の状況によるものと思われる。

第四に、八重山神社跡地には、参道や石段が設けられ、社域を囲む二重の石垣の中央奥に基壇が残っている。花崗岩の切石を三段に布積みし、上部は正面1.82m、奥行1.62mである。その上に載った社殿は通常の神社と比べれば小祠であるが、ほぼ同じ頃に台湾の第20震洋隊が建設した「震洋八幡神社」の基壇は、上部正面80cm、奥行94cmであり（2017年現地調査）、八重山神社はその約2倍の規模である。戦争末期にこれ程の規模の社殿を建てた事例は「本土」でも数少なく、戦場と化した沖縄での事例として注目すべきことである。



写真1 独立混成第45旅団八重山神社の基壇（石垣市）



写真2 第20震洋隊震洋八幡神社の基壇（台湾、高雄市左營区）

### 2. 横浜海軍航空隊の鳥船神社

営内神社とは何なのか、横浜海軍航空隊（以下、浜空）を事例として探ってみよう。同隊は、海軍初の本格的な飛行艇部隊として、1936年に現在の横浜市金沢区の富岡総合公園の地で開隊した。翌年、浜空司令は横須



賀鎮守府司令長官に「隊内神社建設<sup>ならび</sup>並ニ土地使用ノ件」を上申し、海軍大臣から認可を得て「鳥船神社」を創建した。営内神社は、軍用地に建設することから陸海軍大臣の認可が必要だったのである。建設費用は、隊員等から寄付を募るのが通例であるが、鳥船神社は横浜市青年団が全額寄付した。神社の建設費や維持管理費は公費を当てないことが基本であり、神社の上物は私物扱いであった。社号の「鳥船」は、飛行艇部隊にふさわしく『古事記』の国譲り神話に登場する天鳥船神（鳥之石楠船神）に因む。祭神は伊勢山皇大神宮を祀り、同社が土地の選定や社殿の建設を指導し、鎮座祭及び以後の例祭などに奉仕した。「横浜」を冠する航空隊として、横浜総鎮守といわれた同社を祀ったということであろう。

敗戦後米軍に接収されたが、1971年に解除されると、戦友会「浜空会」は破損した鳥船神社を修復し、「浜空神社」として隊の戦没者を祀り慰霊祭を行ってきた。やがて浜空会が高齢化で神社の維持が困難となり、2008年に社殿を近在の神社に移設し、跡地に「鎮魂 海軍飛行艇隊」と刻んだ慰霊碑を建立した。営内神社を引き継ぐ神社形式の慰霊祭はここに終焉を迎えた。



写真3 浜空神社での最後の慰霊祭 2008年4月6日

### 3. 営内神社等の終焉

神社祭祀の歴史は古く原始信仰に遡り、創祀不詳の神社は数多くある。一方で神社がなくなり祭祀が途絶えた事例は数少ない。明治末期に神社整理政策によりおびただしい数の神社がなくなったが、これは「合祀」により祭神が別な神社に遷されたのであり、祭祀は継続された。しかし、営内神社等は海外神社とともに、近代（多くは昭和戦前期）に創祀され、敗戦とともに殆ど消滅したのである。日本宗教史上の稀有な事例であり、その終焉の状況の調査・検討は宗教学上重要であるが、記録は少ない。連合国軍進駐の前に、神聖なものを汚されたくないとして御神体や社殿を奉焼した事例が各地にあり、社前で自決した事例もあり、営内神社等が将兵や軍学生にとって精神的な支柱であったことがうかがえる。残った社

殿が新たな役割を担った事例も各地にある。鳥船神社は「浜空神社」として戦没者慰霊の場となり、陸軍登戸研究所の「弥心神社」は明治大学農・理工学部がある生田キャンパスで生産祈願の「生田神社」となり、横須賀海軍水雷学校の「水雷神社」は関東自動車工業（株）の「関東神社」、さらには会社合併によりトヨタ自動車東日本（株）本社の宮城県へ2016年に社殿を移して「豊東神社」となり、祭祀が続いている。営内神社等の記憶や社殿が、地域や学校・会社などに生きている事例といえよう。企業の神社と営内神社等の類似性も注目している。

### 4. 営内神社等の祭神

営内神社等の祭神がわかれば、どのような祈りや祭祀が行われ、なぜ建立したのかもある程度想定できる。祭神をほぼ把握している69社の主な内訳は次の通りである（併祀を含むので合計数は一致しない）。

①戦死病没者・殉職者	42	②天照大神	31
③鹿島・香取神	14	④明治天皇	8
⑤八幡神	4	⑥稲荷神	4

②以下は神祇である。天照大神が最も多いのは、最高神であり陸軍士官学校などでは武神として祀り、1940年に海軍省は艦内神社や部隊・官衙・学校の神社では天照大神を主神として祀るよう定めていたことなどが考えられる。③～⑤は武神で、明治天皇も護国の神として祀られた<sup>(3)</sup>。この他に兵科と関係のある神を祀ることもあり、陸軍防空学校の「防空神社」は天鳥船命を祀った。⑥は屋敷神の性格をもち、営内神社等の古い事例にみられる。

このように、軍の神社として武神が多く祀られたが、①が最も多かった。戦死病没者は靖国神社・護国神社で祀られることから（戦病死者の靖国神社合祀は1898年から）、殉職者を祀ることが営内神社等の特色であり、靖国神社の祭祀を補完する招魂社的性格といえる。

### 5. 営内神社等の創建理由

営内神社等の創建理由は、およそ(1)守護神・武運長久祈願、(2)精神教育、(3)慰霊・顕彰の三つに分類できる。(1)(2)は通常神祇を祭神とし、(3)は戦死病没者・殉職者を祭神とするが、この場合は(1)(2)の理由も含む。

(1)は隊員・軍学生や部隊の安全、天佑神助・武運長久などを祈るためである。

(2)は育成をめざす精神により三つに分類できる。第一は、尽忠報国の精神の涵養である。天皇の軍隊として、絶えず神前に天皇への忠誠を誓わせることは、特に軍学校で厳しく教育された。第二は、敬神崇祖の念の涵養である。敬神崇祖を忠孝と結びつけて、日本人の根本精神・伝統的美風として特に満州事変以後の日本精神の高揚とともに強く叫ばれた。第一の尽忠報国とも結びつくもので、その涵養の場として、軍ばかりでなく全国に神社・神祠や神棚が数多く建立・設置された。第三は、神明照覧の下での人格の陶冶である。陸軍憲兵学校が「憲

兵の往くところに必ず憲徳神社在すの印象の涵養」を目的として憲徳神社を建てたことによく示されている。

(3)は出身戦死病没者・殉職者を祀り、慰霊顕彰するためである。特に航空関係は多くの殉職者を出したが、靖國神社に祀られないことから、部隊や学校で慰霊し偉勲を顕彰した事例が多い。大村海軍航空隊の招魂祠は、「殉職者ノ霊ヲ祀リ以テ隊員一同ガ修養ノ資タラシメ度候」と建設目的を上申しているように、精神教育をも期待していた。戦死病没者は靖國神社や護國神社でも祀られるが、個人が埋没してしまうことから、個人を想起できる所属の部隊や出身学校の方が慰霊・顕彰に適しており、精神教育も期待できたからであろう。

## 6. 営内神社と靖國神社—営内神社の系譜を探る—

営内神社等の祭神として最も多いのが、既述のように戦死病没者・殉職者であった。また、営内神社の最古といわれる1898年創建の工兵第一大隊「営内神社」や、これに次ぐ1905年創建の高知歩兵第四十四連隊「忠魂社」で隊の戦死病没者を祀っていた。部隊の死者を部隊で祀るとするのが営内神社の当初からの基本的性格であったと思われる。このように考えると、営内神社の系譜として、幕末に奇兵隊など長州藩諸隊が藩内各地に建設した招魂場や靖國神社に遡って検討する必要がある。

招魂場は、四境戦争や戊辰戦争などに陣出した諸隊の戦死者を神霊として祀った招魂墓地である。1864年に高杉晋作や白石正一郎郎によって初めて奇兵隊の招魂場が馬関(下関の古称)に設けられ、翌1865年に社殿が建設された。櫻山招魂社、現在の櫻山神社である。社殿背後には、尖頭角柱の石碑「神霊碑」(当初は木碑)が391基整然と並ぶ。同年に藩は郡ごとに招魂場の開設を命じ、諸隊の招魂場が藩内各地に設けられた。この招魂場が靖國神社に繋がるものとして注目している<sup>(4)</sup>。

靖國神社は、江戸城に入城した東征大総督が、1868年6月2日(日付は旧暦)に西ノ丸大広間で東征中の官軍戦死者の招魂祭を行ったことを起源としている。翌年6月に、軍務官副知事大村益次郎が中心となって建設した東京招魂社(1879年に靖國神社と改称)は、同月12~24日の軍務官達等に「招魂場」「招魂場取建」、『招魂社沿革記』に「招魂場小社」と記されるなど<sup>(5)</sup>、当初は「招魂場」と称し、29日に軍務官知事が祭主となって「霊招式」を行った。前年閏4月に神祇官が設置されていたが、江戸城での招魂祭は大総督府が執行し、東京招魂社の建設と霊招式は軍務官が行った。戦死者に対してその軍で招魂祭を行うという長州藩招魂場の祭祀のあり方が、「招魂」の名称とともに受け継がれ、東京招魂社は以後も軍務官(のちに陸海軍省)専管となっていったのである(この故に賊軍祭祀はあり得ない)。長州諸隊と密接に関わった大村が東京招魂社建設にあたったことも、両者を結びつけた可能性がある。

陸海軍墓地は、徴兵や志願により集められた国軍兵士

の墓地である。1871年に最初の陸軍墓地として大阪に真田山陸軍墓地が設けられると、域内に「祭魂社」(招魂社)が建てられ、招魂祭が行われた。同年音羽陸軍墓地建設にあたり、兵部省軍務局は域内に「一社ヲ設合祭相成度候」と伺い、埋葬者の霊を合わせ祀る社を建てる計画があった。東京招魂社も、官員の神葬墓地を神域内に設けて「小社」を建て霊祭を行いたいと兵部省が太政官に伺っている<sup>(6)</sup>。墓地と社の関係は、長州招魂場に社殿を設けたことに通じるものがある。陸海軍墓地は、官軍が国軍に変わったことによる招魂場の新たな形態とみることができよう。

ところが、台湾出兵・西南戦争の戦死者を埋葬した長崎の佐古招魂社は、1881年に社殿の建設を取りやめて合葬碑を建て、真田山陸軍墓地での招魂祭は1883年に墓域外で行うことになり、招魂社はやがて廃絶した。墓地と社、遺体の処理と靈魂の処理の場が切り離されたということである。その変化をもたらしたのは、1882年に神官の葬儀への関与を禁止した内務省達丁第一号と思われる。この法令により、靖國神社は神職が音羽陸軍墓地で埋葬式を行うことができなくなった。靖國神社は、創建当初から神霊のみを祀りつつも、陸軍墓地での葬儀埋葬の一端を担うなど長州招魂場の祭祀に繋がる性格を有していたが、1882年以降はその性格が失われた。

営内神社等は、死没者の葬儀埋葬に直接関わる施設ではないが、部隊の死没者を部隊が神式で祀ることに於いて、長州招魂場や靖國神社の祭祀に通じる性格を有していたといえる。営内神社等は、関係死没者を靖國神社で鎮霊した御神体、あるいは神符を拜載して祀るなど、両社の関係は敗戦まで続いた。

## おわりに

営内神社等は、さまざまな性格をもって近代に創建され、敗戦とともに消滅した。軍と神社との関係や、近代の戦争に神社が果たした役割などを探る上でも重要である。しかし資料が少なく、全体像が見通せない。艦内神社を除いて200社程確認しているが、全体のほんのわずかであろう。研究者も少なく研究があまり進んでいない。営内神社等の情報を求めている。

## 【注】

- (1) 拙稿「営内神社等の創建」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第147集、2008年)、同「営内神社・陸軍墓地等から見た霧社事件死没軍人の慰霊」(『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』神奈川大学非文字資料研究センター、2014年)、他
- (2) 前田孝和「『大瀆用一文書』に見る八重山神社建設計画と未鎮座の背景」(『非文字資料研究センター News Letter』No.42、2019年)
- (3) 拙稿「護國神社と賀茂百樹」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第51号、2014年)
- (4) 津田勉「招魂社の発生—靖國神社・護國神社の源流を求めて—」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第3号、2009年)
- (5) 靖國神社『靖國神社百年史』資料篇上、1983年。岩田重則『靖國神社論』青土社、2020年
- (6) 1870年4月4日。『太政類典』第1編第129巻・教法・祭典4